群書類從

百六十三上

和書門
類
號 九五九五
函 二〇四
架 四
冊 六七〇

内閣文庫
和書 類
號 九五九五
冊 六七〇
架 三四 函 一一五

内閣文庫
番號	和	9595
冊數	670	(219)
函號	214	39

群書類従巻第百六十三上

撿挍保己一集

和歌部十八 千首四

為尹卿千首和哥

春二百首

立春朝

紀乃海やまた夜ふかく立そへて今朝霞こめし興津白波

立春天

こゝろやかはあらたまるとなしもの霞もまたたちやそめしと

立春日

あら玉の春やかの山の始に霞さそふむかふ空をみよしの

立春風

春やとき立かへる波の花ことにとけそむるらしさそふ河風を吹

立春霞

あさみとりひらくる梢のうすかすみかすむや春をまちつけしむ

立春雲

横雲のたちぬるそらをみとりてかすみあふ山の神まつるそら

立春雪

れまちの雪とはいへと今春のきさしみゆる嶺の松風

立春氷

清吉野やかねてむすひし瀧の糸をとけぬるからに春は来にけり

立春水

すむこゝろ春の岩井の朝かけにくみてしらるゝ清きの水

殿立春

ときはなる文林のことのはもちひろの春をあきしの門雲

早春山

下もえの若草山の雪とけはそれもみとりの苔のむしろ

早春関

春やわか木幡の関のはつわけにかけつゝやみすてぬらむ

早春河

氷とく浪もあらためやはらかくも春めくこゝろにかへるなる

早春湖

春れさる霞の袖に旅にかへのと花は枯しまれからん

早春浦

とはなや浪をわけ出し松山の浦よ木のりきてや春のさゝ浪

初子日

賀茂山のまつをわけおひそめなりてとも二葉の松や千歳

子日松

此たびのひそぞ浜の松たかけ子日にひかれて昔ねむすは

子日祝

今はきみか子日の松の生ぬまは君か代をそへていくよふるなん

山霧

滝のうへの山はみかねの名をとめて霧のこゑにたちわかるゝ也

嶺霞

嵐吹峯の松を春ちかきはいつれの山の春そみえゆく

野霧

蘆みちのすゑ野辺の霧ふるてかつくれこゆぬ萩の原

関霞

あられたて霧の立まよふ相坂や関のあなたの春のおもかげの

径霧

かくれ行野原の末の夕霧に草をわけつゝ鹿そなくなる

橋霧

まれにこの長橋わけて霧ふかみそこにつくせさの井在

江霞

くさうえの入江の波のうへも霞それかとみとりの色にほゝて

滝霧

山高みこゝろさし落る音して霧も岩せの滝のしら波

河霧

宗そこそもそれかみえつるかは清る宗河瀬の霧やかゝるらん

海霧

奥めるかりそことみえてうなはらや霧かゝる人のあまの清舟

湖霞

いとゝなほ残るみるめも波乃綿かけ霞にうつる志賀のあさなき

濱霧

塩風に吹かへさるゝ濱松の枝に霧のかゝるそとふ人なき

嶋霧

あへてこみ霧にまかれて嶋のなそらう河之新まつ舟不行

渡霞

月新（そ程イ）そかすみのこれる岡つゝみ出る渡守のゆくへこのみえ

里霧

あかなそなこれ袖の八重霞吹きなちらしそ難波の風

旧巣鶯

さそもそれまちちかき小野の八重さして谷にこもれる鶯の聲

初鶯

たは草なきまにうちわくきゝて今朝よりのこれ鶯の一声

雪中鶯

雪おもみ枝たれ中にうつりし清きそのこゑにいるゝぬ鶯の聲

暁鶯

晴ゝぬ月影もむかしの山の端残りなくなれそのひとつの聲

朝鶯

胡戸明あからひよその鶯の聲を通はゞ庭の梅か枝

夕鶯

山人の住む木の下かや去ふらんくるそ今これ鶯の聲

里鶯

あかなきて旅人の里の梅をしれ鶯さゝる月の明ぼの

山家鶯

山風のさそひしたるさゝかきこれ友とへまさは鶯の聲

竹鶯

窓ちかき竹の末葉をうつしなれあなたかなるひとつの聲

禄見鶯

山さと（里イ）はくさ葉のそこにかくれて袮覚にかはる春のこゑ

野若菜

先消る雪間やはるとうちかくれぬは野への人に若菜か摘や

原若菜

よそにも雪消かりし日数さへ野の原に若菜摘てん

沢若菜

汀やなからふみつと摘まし河の誰か野沢のまかろるなれもん（祢ころイ）

水辺若菜

なかれそふこの若菜はつゝ流れまぬよかせてあらはしかは

田若菜

うちもえて門田の若なつむくもかやちるれよこそ成らん

岩残雪

やらく我かそこと打くく水茎れかへよふうち残る岩の白雪

草残雪

きえ残るぬ雪かりそれ河辺のあらぬ岸の袮あたりや

木残雪

志らこ松やせへかてうき津むらんあかたのすそれ雪の村消

餘寒月

おかのかたかるひさよそう見わたせ雪けえれぬまのよ月

餘寒風

まさご浦や木のめとりて小城ゆうて霜うち拂ふ山嵐の袖

餘寒水

たちかへる又や氷にむすぼゝれん霜けさも寒き山川の門

梅霜

志らたへと見えさぞ見る霜にまがふもうすき朝の梅かえ

春風

いはぬこそ風のつてとは志らねども梅のうつりにまぎれ夕迷

夜梅

思ひ出ぬ昔見えぬる春のよは梅が香かよふ手枕の内

故郷梅

故郷は(のイ)いくかへて経ぬる人のむかしの宿の香

里梅

こぞのこゝろありけるすまひに梅と酒のしけかひとぞ

庭梅

来る人まちしものさは花とぞ後乃庭の梅かえ

簷梅

さそひくる軒端の匂ひのまぎれぬは梅咲たる私の春風

隣家梅

花すんむしとおもへさかけるまれ中垣乃庵てこゝに咲る梅かえ

梅殘水

何となく花の香うかふ初瀬川梅か宿より風やふくらし

梅薫枕

春の夜は川風寒み袖枕花のかとふらふ夢乃たゝね

梅香

たれ人や梅のむかふ夕風に匂ひとうつりぬる袖のうつりかそきる

折梅

とひ来ぬはいたく花のいろ米をとて人のとかしおもふとかれて

若木梅

袖ふれていくとせかへんうつしてもいまそことしを春の初花

紅梅

心して結ひかへてよ柳乃いとにむすほれくる玉井

落梅

うしやたゝさそ庵の軒さしよめ梅からちりてかゝる春風

柳露

朝みとりぬきてとむる露の玉枝もみたさぬ風八吹くもかな

池柳

青やきのはこれおへのさゝ枝すゝひ乃池よま風そふく

岸柳

立田川きしの柳やうつむらむみとりそふる色にほひつゝ

門柳

佐保姫乃柳のいとやくてあみし川の針にまよひくる風

河柳

面かけは淀の川浪たちそに今はと中の岸の青柳

路若草

冬かれの野もせもえにし雪まつもりしらくあさちの芝

野早蕨

さほの又あるもえいて春の野へなかなかにおくれし里の早わらひ

携路早蕨

袖よりは花折りそへて山人のかへるつま木やさわらひ

山春月

引とゝむ花は霞のたちいりし月やそなたにいさよふらん

関春月

相坂乃関の杉むら出くたに清水にうつる月そやとる

江春月

なにはえや春の霞の絶まより入江は杉にけさの秋まつ月影

春暁月

月は猶霞のそこにのこりつゝかねの音すむ明かたのそら

春月幽

夕ふかくかすめる浦の春なれは袖にうつるぬるま月影

朝春雨

紬店の小志の乃袖やうつろんあきにほのさらすのまよひ

夕春夜

まゝ近ハ入れのゑんうらさ花の長閑きさ三更夜に霞かな

谷来雨

水音乃さゝら汁も谷のとよみ谷ハ木かれの春雨かな

雖春雨

あ残ゝ中く梅か咲くとの春夜にほし枝さひし柏木のうけ

庵春雨

猫てころんしよ口やら野らの萬屋ハらしの春よあ

春的

春的ハ山おもたらぬ猫ころんてとうやら林しにのさらかな武

園雉

鳩もころいかなせ野人の夕霧すこやかにかけとほそ嶋ん

野雲雀

志りたかも人ありくすほとあき也や野人あともちぬ夕立　うち武

踏雲雀

すきこへ行野田乃芝生や北らうんかくものつゝ雲雀鳴　藤才　自り

帰雁知来

うかりきろき我行やいつらん嶋てそ人る春ハ雁ヵ雅

晴烟雁

後さへなきさそふ春の雁鳴すてゝもあらぬこれの空

夕帰雁

閑佗ぬる夜ハさひしき雨の中に雁一二ツ鳴くなれの空

秋帰雁

我かくこにはかくこおりしてすみなれし田面の月よ帰るかりかね

帰雁連雲

うれてもつそなるこの雲のあとふ文をきてひく〳〵かへるまの雁

峯帰雁

玉津島まやいつるぬさとふらん雲あてかゆるよの大空

海帰雁

と舟まつうかゝるかこれの絶間けり奥ぬみゆる波よなくかへる

帰雁似字

うすき霞下もなる雁や玉章のうへにくつろきそめぬらん

帰雁幽

なかせともつるひまろ夕霞をのまそこさそて帰る雁金

遠帰雁

さすか又山をはきてぬ経る也や霞にのこる雁乃一行

春山

今ハ又花の面人のかとなり雪うち晴てすまれの空

春暁

柴の戸はまたふかき山の春の色にはきえのこれる雪かな

春閑

東路の名にはなれし霞織て霞とかゝるむさしのゝ末

春河

水上の雪きえの水やまさるらんかけと織るちる絹乃川なみ

春海

伊勢の海や波のあやの浦は花のうつして霞むにほの奥の
つりふね

野梅

あさ沢乃蘆まじりの若菜つみてかすみつゝ行人あさる

遊糸

永日の影にのこれる花のくれふかきても春のいと東

待花

あまたゝひまつにあかぬ花も墨つきさくへき頃やさくらかなさき

栽花

植てたにくるゝね桜花の山やのちのちにもちくらん人の

翫鶯

何かくれのすにはうえさつかくかさまれたる山ゝみ

初花

咲ぬとも見るはきさらきの月のさかりの庭の初花

見花

かくしあ光やとし山のさくらをもやよひとにうち霞とこそすれ

翫花

けさおきし夕くれまてハめてし花を守月よも又やむのまてとし

折花

ちるとも山路の雲や里人の手折りてかへる桜ん

交花

嵐吹尾上の花と入あひも袖におちたる志ら雲の山本

曉夢

さてハたや花成夢の山かせもさもわかれぬ志ののめの空

好花

花の色にあくかるる雲に立田山雨にぬれても峯にかかる

夕花

同人ハ今日もとめる山里にてをるはるかに入あひの鐘

夜花

明ハてん梢の桜ちるすかたまた一夜の床のやまかせ

山花

さくらも山にまそめやまかせにもちるめれちるはなの

落花

あし吹くそ山桜ちるとても峯にてよその雲のみはし

谷花

山かせハ花のかハ波のたちて桜よせくる岩のしらくし

窓花

花見つゝ夜さへ寝ぬへきと窓に月をもちひの影の夜の思

杜花

いつれともしらぬ杜の森の桜花さへすきに木に掛と絹

野花

有とある野中の桜咲ぬれは山をもそのぬきさかりかな

峯花

逢坂や梢の花をゆきてとて関よりこなた見ぬ花の名のせ

滝花

布引やおちくる滝のしら糸をかけてそちる波や花のしら波

禁中花

九重の花のかさしをたかゝ雲井の春の明の空

社頭花

神垣ハ花咲にけりかしこくも今そ江戸のあさくさの宮

古寺花

初瀬山花の嵐おちくるは花にはゆきぬ入相の鐘

故郷花

いにしへハみやこと北野立出ん桜かぬる浅茅生の中

里花

花さかハ法きかんといひし吉野のなかなるさとハみよしのゝ奥

山家花

白雲ふかき花の山に人やすむらんけふりもみすなれぬ花の中ふかく

庭花

さくら花の下枝のしつくにて露ぬれも庭の苔の衣

閑居花

今そしる竹のひとむらしつかなるおくある花に庭のこゝえぬらん

花雲

さそひゆく風の梢にきえぬれは松にかゝれる花の露色

花雪

しりたる風のしらるをまつ松の葉にちれる花の白雪

花枝

枝ハちれとふかみとりさそさくら花かけの庭にはれぬ花の白雪

花梢

梢には花も木末（山路イ）に立まよふそれかとハさハ庭の花のしろたへ雪

花本

引とゝめ霧の人の花さそふつらさそも木かけならむ

花根

鳥はまたしらぬ谷の桜花ねにかへるてふ山のそ梅るる

花挿頭

たはふれにうつせやうつるおりのふとらふ行ハるゝぬ袖

花手向

いくたひか心つくしの手向して花にあかすも神やうけけむ

花麻

おりやきて小神路のさくら花をぬさにたむけむ人も咲花の名

花枝

さくら姫の花の枝やかさしけんうちなひき花のさかりにのとけき

花衣

木のもとにやすらふ花衣そめつゝ花すそも山風そ吹

花鏡

鏡とやみる花なる桜木の影うつるらん月もさゝ川の水

花錦

志賀の浦あてにみえける花は深緑の錦の名にそ山

花匂

梢こそ花ならむ色はひとり桜はたゝ春の山をと

花色

春風にたゝぬ山ならし花の色はやかてひらくへおのつ

花使

花ハ桜の花ならむや咲花は色さらにほひのつかひなん

花主

涼しさも花よんとする春も武人はそらに猿座との夕逢

花面影

面影をたどらえぬ桜花散るはからし奥乃山風

花形見

たかうへし花をとらへしもいはれりやみて思ふへき人はすゝも

惜春

あまりそとよ猶しは数のつもりて積るは花の庭の白雪

落花

さそいつや山さくらはちりにけり花もとまりて帰る人

残花

しほくはまそれや風をのこして咲るはる山ありての桜哉

三月三日

さゝ又三月の三日の月乃影をやさしみそよ桃の花

桃花

志りきて代はまう見る御や夕日影まてある色あるを見るさそ

梨花

清らかや軒乃梨花なかし散るのちむさしの門もとちて住

山田苗代

本末はまず門おしにや流し小山田の一町の苗代乃水

路苗代

あら小田の苗代水のかとみえてたれぬる里のかはつ鳴覧

河苗代（色イ）

三輪川の水をせきいれてことや文なる山田の苗代のころ

夕蛙

暮ぬれはいつれ堤乃下水にあかねうちそへて川ず鳴なり

田蛙

雨ふれはあれ田のさなへ末ふして水はれあさみよ蛙鳴なり

野菫

紫の若菜にまじりつゝ菫とて摘し人は花咲にけり

庭菫

跡たえし庭にしけりて菫草枯錦なれるさまにそ有

摘菫

露ふかき袖はすみれと摘しれて帰るさは志るのゝ月影

松下躑躅

たちそひしつゝしは雲の下紅そめしかめる風流也

躑躅紅

あられなくみぬまし思ひの色はつゝし咲けれとあかぬ色にそて

池杜若

ちるをたに惜む杜若人のみつゝてみさひとりかへる池の夕風

沢杜若

水よりもなかにいふ人のさゝつんたなれにおさ波のかけやなるらん

款冬露

款冬や小井手の河せ吹よするなたちてもあれ山吹の露

夕款冬

暮となる雲をしもえいぬ夕暮の中の花は山の款冬の露

路款冬

行屋ちて花に志つしそむる行衛のひとつ山吹のする

池款冬

池水はつのうき葉にうつろひて影見ゆ岸の山吹の露

河款冬

まし姫のさぬの色かりし山吹は波おりかくるさゆる門の色

嶋款冬

咲によ月の名ある花なりて又いゆ嶋の辰とさまれは

岸款冬

移しは山吹の山吹咲よりの花の下行宇治の川きし船

里款冬

あるこうちもいそての里の名を花よみさくら山吹の露

庭款冬

意戎苗くも不思成ゆ名ある人しら溪の山吹の花

籬款冬

さえおりる霜をもさやにはらひかねぬ八重にかゝる庭の山吹

夕藤

さかりなる夕はえそふるこむらさきそへてこそさけ松のまつれ藤なみ

窓藤

そらなるふかゝる人の松の紫とかゝりて猶まさる藤のむらさき

池藤

世の常とはいはじ池とみんこゝは紫の藤さかりなれ池の面

江藤

志ずかにて江河の末のそよぐこゝは松文こそもとの藤波

浦藤

多祜のあまのしれぬかゝぬるをはりとそこれも藤の浪やよらん

岸藤

松川岸おとす代々にかけて藤なみうちよるらんさまるしれ代々かく

松藤

千代の松のみとりをよそにしてぬへしむらさきひらける藤のむらさき

春欲暮

わか身にもつるとせめてわさそふまれはかすは限りおりたちを

暮春月

名残をはいまはもせよとて三月かそへつゝ夜明る河さ

暮春雲

ねおりふしきこゆるまれなりしそのかねての夕暮の空

暮春霞

さてはやも霞のすゑに舟出してくるかたしらぬ春の白波

暮春鐘

あちきなく花をつくるも心あれや三月いる日のあはれさそふ鐘

留春不留

いつはりにはてとふかきまれなりけりたゝやしやそてもしりぬとはるや

惜三月尽

めひるしや心まよはすそてもみえつゝみをまぬ夕の別ち

三月尽夕

限あれは桜の散をもおしむまそ春よいまはの夕暮なるそ

三月尽桜

なまじひにてもなほ西にけふ花の霞にとなりとや春のゝ孫

閏三月尽

三月桜をなほ紅葉の中なるかへるは日暮ぞ柳花をゝしむ

夏百首

首夏

花の名かへる花の春をちえても花もなのきはし夏の山を世

朝更衣

袖よそにかへて今日は夏衣さえたもぬるまゝふりそめぬ桜の羽衣

更衣惜春

今日乃袖あらたむるとも花染を猶みそらけふ小新やうらめん

餘花

おもひきし限りも今ハ山桜花なれなれし花にむかひて

新樹

なかなかに新たなるへし若葉して梅さけハあかぬ花の木立哉

踏卯花

よそに猶しげみの緑よ雲かゝるも卯花ふみそれを路のひち

籬卯花

海ぞ養する行かたに花ぞ見ゆ木かくれて雪をそへる籬

田家卯花

おかしくハ月もさしも卯花のそれ田中かゝる衣富の下か

卯花似月

皆人そねむ月ハ秋とや秋もさしも卯花も山乃あたりの木の下

卯花似雪

玉川の里の垣ねの袖さへも雪に不知乃卯花の木々

葵

とれつはかくるかけのや社かる文字には葉の名をの川まさ

待郭公

待まきも限りやあらん郭公小夜の中へ月乃明かの

為郷公

とおなくきこえし来にけり郭公花のちりかさくらなりけれ

人傳郭公

郭公それならそあらぬ鳴つてはさてかはむなしきこゑとききつらん

初聞郭公

せめてくたらぬ夢路にたとひをもいつかに行とも覚る 新古

郭公未遍

こゝろ川たれそなきていひし郭公一声きかぬおもひの夏人

月前郭公

月かけもなくさまよふ人のきくにいとへはそれさへかなし 山家

雲外郭公

郭公なほ雲のはたてに月のかけ又声すみて一声やなき 衣笠

雨中郭公

新さつき雨のふる夜のもいて郭公さえたくはなき今も鳴らん

嘯郭公

横雲はまたきかゝれ郭公そのまゝそらや海のうへにほる

暁郭公

めてゝまつも夜のあけ郭公月はおほろそに川きはせんてまち

船郭公

ひとり人のおさまるとやまかん志のひねもす郭公 に作

夕附鳥

出にしのゆふつけ鳥の郭公又まつる人さへ月をみるとて

夜郭公

りやとてよひの手枕あかずして旅ねの夜半の郭公かな

山郭公

夕雲の木ずゑの岩の附鳥一こゑ高の山ほとゝぎす

杜時鳥

月みる木の表の郭公いふつまとろ時鳥鳴なし

里郭公

うき身まつ人うらくらと附鳥まてたよりもなくかくも山の里

野郭公

いはさそをまたん郭公山ふかくとはむさしのゝ原

原郭公

伊吹山さしも行かふ附鳥あさのゝ原をやすくなきなる

関郭公

鈴鹿路の関にとまらぬ郭公山田の杉にぞ鳴くらし

浦郭公

郭公せとの入江の蘆やこそをたまた声はぬあたりの里

渡郭公

村雨の今は山田の渡りして月まつこそは附鳥一声

夢中郭公

夢ならてそれかとハやかさん時鳥はつかに枕にきゝし後もすく

旅宿郭公

啼此目さまし草枕そへて浅露ちきる郭公哉

獨聞郭公

思ひよる我今宵そひとり旅枕かさぬ独やきかん

郭公幽

くるかとそれかとハかり隔ての郭公ほのかなき海ちか一声も我

田家早苗

十代よもたゝぬ庭田のさなへ我思ひのてまくらの猿に福

急早苗

小山田にかへしかへたみ一町もなをふたりなしとさなへとる

早苗多

うちむきて千町のさなへとるなれはしは一村ハともしき人そなき

池菖蒲

池水にしけりてしけやあやめ草水よりもなをにほふ明

沼菖蒲

今ハたゝかりてくるしあやめ草ぬまのぬかハれとも

刈菖蒲

あやめ草ぬまの水をも朱をも刈来てあやめ小契るのの暮

亀橋薫風

むらさきの絲くりかへぬ藤なみやかよひふきゆく風のまにまに

雨中亀橋

雨そゝくさゝたちくれの枝あれてかよひまちかれ旅人の跡

深雲橋

昔たにうへし水のかけ本まてもたちかへれのゝ秋夕を

樗

むれ去紅葉の梢も何となくあふちさく秋かけれ夕を

杜五月雨

さすらへ月の杜水の五月雨れ晴ぬふるも杉の下露

山五月雨

さみたれの程五月雨はふるさとをわすれて埋む山の下葉

松五月雨

松門のさゝのつゆわかる山みちの絲ふかきふかさこれの比

橋五月雨

五月雨に下ゆく舟もわかれまて橋まてとゝくらぬ汀波

江五月雨

蘆鴨のなく江川に枕ならへし根はみな波をさへこれの須

滝五月雨

水まさりはしる水わかれし淵澤瀬の今をとちまさる滝の波

河五月雨

棹さゝぬ田子の川の瀬とやなるらんぬさこそことしの涼

湖五月雨

なつの浦や浦さゝ汀の五月雨に藻もとさん波の志ら菓

浦五月雨

海士の住む磯屋にかゝて波越て志ほ干もみえぬ五月雨のころ

古宅五月雨

志のふ生る軒はに水もかなかつこれは人の五月雨の比

夜水鶏

さゝむ秋の槙の戸口のあけてさこそやたゝく水鶏成らん

夏夜

月の名のたゝをしむを追風にあてゝすむ夕かせの空

雲間夏月

短夜の空やいそく夕雲にまよひて出る山のはの月

水上夏月

夏刈の草をあらぬ流に棹さす月のうへも秋の空

樹陰夏月

なつの葉のしけみかくれてふかん袖よ志ろく小夜のよね

夏月涼

いく秋かゆくたにしもにぬるらんやすらふ月のうちね

夏月易明

すむとそみれ夜をとしひとつ夜は梅のさけられ八月のおもかけの

瞿麦露

たくひなやまつ花よ志の姫ゆりもひとつまてら床夏の露

夜瞿麦

露わけて人まつひとね花をとう月にさひて昔に色つく庭の撫子

夏草露

花さかぬ夜わけ草にむすひてやこそ色なる露と結ふらん

杜夏草

何られ森のむ花に心ひとしらぬ結ふらん志けみとまる木の下草

野夏草

ことしけれたまぬらのそ夜ふつれ露とりやみをのしけき

径夏草

露わけしま夏野れ草ふかくまさてふかぬまよふたの一路

庭夏草

たかきをそうれすそあるめ月影と露とて茂る軒の下草

夏山

ふきやすみの桜の山の青木立おのけうくて茂つきあひ

夜野

茂つとも野人のゆるやまつてもとのさんのわけ露の下庵

照射

いけしれ鹿よりかくれかりしにもゐるほとそともしの影か

鵜河

篝火やかくしえ由らやふくて糸の瀬のかゝりかゝりなかるらん

秋螢

こりしたのまくれの下にも由乃光とみゆれや宿れ草葉なりけん

橋螢

ちりし間とこのあかるさてそして橋の下行夕やみれそ

水上螢

池乃面にうつる螢火のかけ月夜なくてもすゝしかりけり

池螢

夕闇にゆきくる螢そうつる月に光やかゝれいけのおも

江螢

たかくも見え入江の月乃影に又光添てたつるこほれ

沢螢

月にもなき松陰にもつる沢さきの山くれ沢の螢火

浦螢

海士人の夜漁とむかふをともし火にていさやれかへるまゝ螢火

草螢

たそや草葉にさきて花かつる又あかつきの花かのかん

螢似露

花薄みたれて露もちかゝる葉の上を来那に夕風そ吹

螢似玉

葉の末に玉ぬく露の数そへて螢みたるゝ野への夕暮

故宅螢

とちはてゝや煙はたえぬ宿にたえすまかるゝ里のまとにみえつゝ

垣夕顔

たそかれの竹のあみかき来てみれは夕顔にほふ河ひとの宿

池蓮

池水にかけふかきやうつるらん蓮の浮葉の中に立ぬる

氷室

いにしへも一つにふりてたえぬ松か崎うつるもいかに氷室なりけり

夕立風

風さそふ林の梢たちまちにあらくもゝるゆふくれの空

夕立雲

玉水の音はかりして夕立の跡さへしめるむら雲の月

山夕立

夕立はふもとやかゝるおちて晴て青根か峰にひかる空

河夕立

橋もなきかたの中の夕立雲に一のせ渡るたかせの河波

夕立易過

白雨の水海さまされはやまをみて涼しくもふ山は月影

杜蝉

鳴蝉の声一しきり高けて雲ハいつかたに行木の下かけ

樹陰蝉

川そひの汀の浪をうつ木にも風柳にそ秋夏なりゆふ暮

松下泉

松陰やよわる岩にせく水にて清水ハ中くすゝしかりけく

夕納涼

山影やゆふへにさぬる滝のおと花ほと聞ゆる夕陰と

樹陰納涼

ほさるよ杉木乃柳はあつさもしらす志ゐるそぬるく成（ぬるる）

納涼忘夏

ゆとあそてハしゐもとしれ夕暮にこぬ秋かよふ松の下風

六月祓

あけぬとてかゝるに出ぬ里人やなたかひとせは祓志らん

秋二百首

立秋（胡イ）

さそふらん一葉そよきて袖まさる木の葉はまそよ秋の初風

、立秋天

秋はやゝなかれの川波乃音のかはらおひちりくなかにかさ民

立穐日

朝戸明の前にさやきそよきて今日秋にむかふ初秋のそら

立秋風

荻に吹風も涼しく今朝はそやいつしかかはれや秋乃初風

立秋露

いはとはいさちるらん玉結ひ置秋くさしひの露の手向

初秋霧

かみとなくは萩花の枕袖さらし旅ひとは乃なる音の未

初秋夕

秋よたつ日数をゝねはいつかならんいまこに涼き風ふるまとの音

初秋夜

夕月秋それそあるあ萬をたまさそもえてねぬ初秋乃ころ

初旅雲

今はまた早き風にかけても秋乃風しひのうれせて今宵

初秋衣

小萩衣萩をおく人を吹よる風にまかれつれ袖の秋風

待七夕

一とせをとて待あふ棚機のいましかこそにはちるつれ○

七夕雲

夕霧の立舟はさてもいつくらん乗うち渡れ星合乃空

七夕霧

志のひその雲のかけはしわたるらんひこ星も天の河原の夕霧の空

七夕橋

年こそ星のかくしまちたえせしや鵲のさの橋乃星合のそら

七夕夜

榊桜乃海士の拾夜河かねうらうさてそ海こいもろと

七夕舟

はるも海こえそのまゝかやこれ知らん河乃月のなかれに河舟

七夕後朝

なとはらちもかくさそ淺瀬まさこそはらんて乃河舟

暁露

明ぬるも朝より河舟白き手照れ其の露を拾へ

朝露

朝あきれ月は宮こそのこりけつ露乃置ともみえはなて

夕露

見おろすにも夕はうられ乃あさちか原露にかゝるかと来とも

夜露

秋かくは月まそゝれも宮て寝れ人はかこぬるも夜の露

野露

あけかたの野辺の宮には雲の晴ぬまゝとちにまよふてやるか露

原露

月そやとる中川なとも神なみそれわけ行のゝ露乃秋のそ

径露

あさ道たゝすそにかゝりて袖ぬらん露そこそあれのさと

故郷露

枕にも袖にも月のあひやとりうつるやあれて露のふるさと

庵露

面かけし野原わけて来ぬ秋ならて露なき人乃庵

庭露

見たにさへ草葉乃風をまつ露乃あはれはかりの庭の月

草露

木陰をとりてたわる萩の錦まつかたに一すしなるわけこれ玉る露

浅茅露

ゆふくれに月影うつり来ぬらんあさちか露に月のやとれる

苔露

うつさらにおきまよはるゝ露ならて苔むす嶋か山の下風

袖露

秋ハみな露も涙をわかされはあはれも絶て秋なきら津

枕露

うらかれいと露しらさそふ浅茅生の末の秋かなかなと

夕萩

夕しめり秋たつ風の萩に吹風のみさそふはなかりける

秋萩

風の音もきくに庭にしつむ露にしほるゝ秋萩の末

江萩

行へまてこゝにみゆる萩原を塩の入江におもひしるらむ

庭萩

さかりともしられぬ人に月の前栽の萩の一もと

簷萩

散りかゝるとてもなかなか惜しむは梅の紅葉に萩のうへの露

野萩

とゝまる露乃綿かゝりてもこえぬ人しかとにほふ野辺乃萩原

行路萩

行人の袖に露はをきすらし末野の萩の花をしをりて

河萩

咲ちる河の萩こそ立田川紅葉やなこぬ錦なるらむ

湊萩

小舟さして湊の海士人の袖にそまりぬ萩か花すり

庭萩

宮城野は秋のさかりもかゝらぬや小萩こほるゝ庭のゆふへを

女郎花靡風

さても又ある秋風になひきなへし結ひもとかぬ露にかゝるらむ

野女郎花

とふ露のたもやはらにさゆる女郎花さか野ゝ風にうちなひくなり

径女郎花

夜々の雨露みちそ女郎花さかる野へ露に咲ふ利

野薄

行人は思はぬ程に落ちなひく人まねく秋の夕暮

原薄

あつまくも又さゝ波のよるとてや尾花か袖にまねく河のへ

径薄

わけゆけは尾花か袖もうちはらふ道のさゝめく人に秋風そ吹く

刈萱乱風

里人のかくにかるかやの乱るとすこし花乃人まねく世の世

閑刈萱

思ひ入の松の下みちにてかるかやのれおとのせふね

庭刈萱

さひしさやかたるかるかやの風にさへ一本出る庭のかれのゆ

蘭薫風

なべてより花かきりまさるは萩にぞ思ひし野辺に秋をこそ待て

蘭露

ぬきとめてたがかけしその藤ばかま吹く風ごとに露ぞこぼれて

鴈紅

萩が花その露ごとに咲く萩の花のそめしは色とも見えし

籬槿

いかなれや花の子をとくやへだてぬ籬に咲ける露のあさがほ

暁虫

草の原おきてねさめてきけばあかつきのなくねかなしき虫の声

夕虫

夕露のおける草葉にやどりける月の影をもまつむしのこゑ

秋虫

君まちぬ宿の下草おとづれてひとりぞすめる秋ふかき虫の声

野虫

小鷹狩それ野にはあれて鳴く虫の声ぞ千々なる野辺の色の草村

床虫

草まくらそれかあらぬかむすぶ手にちかくなくなる床の虫の声

径虫

おく露をふみわけてこそ庭までもわけゆく草むらのこみちの声

庵虫

行かれなる草の庵乃荻荒代あきかねて虫もなくなり

庭虫

庭乃面のよは浅茅のそれはかしも霜枯るとてへしく虫乃鳴也

園虫

男とも見る花のもとのし丈乃虫ありて枕の上まて聲をあはれ

閑虫

村雨のすぎし草葉にすたかれて声しはしも虫の音ぞする

暁初雁

有明の月をいさよふ雲路より今なくや乱るゝ初雁乃声

夕初雁

都まてなく来の紫色清く夕暮の空に消て雁は来にけり

秋初雁

山乃はの月出る比の浮雲をしるへにそへて渡る雁かね

雲間初雁

まつ宮をとりの羽色やうつらん雲路よりかゝる初雁の声

山初雁

霧こめてやへたつ山の田には也山乃尾上にあれなれつゝ行

嶺初雁

清きなる峰乃嵐越て来る雁やおなしもしれぬ小田に落ちん

遠初雁

満しほに渡る小舟の棹たえてやすらふ岸の夕暮の空

近神宿

守小田の稲葉の枕露たえて袖まてぬるる露のおきかはる哉

神宮寄

絶てしや今は八月のかけもまたかれ行宿の浅茅か袖

初秋幽

吹風も後そしらめ夕暮の雲の行衛の山のはの空

朝霞

雉子かせく声をきくやまかへる朝霞のたえまかな

夕霞

月も海に夕日の山を出るさへ入日よりたに残る夕暮

夜霞

あかつきの月の影さへ霞むかや志るへの暮の秋の夕暮

山霞

山の端をそれかとたとる椎柴やとをさかるらむ朝の空

谷霞

門前の霞のふかき高嶺にはあまの山おろし谷の夜よそに

野霞

かすみつつ雉子の啼らん夕月夜むらむらの野のさかりの空

有明の月のなこりをかなしくと小野より出る小男鹿哉

原鹿

さ夜しはのはまらふもとのうへに月ともを待まし日なくらん

海邊鹿

舟にさし浪にそ山をも見明石のうらと野をも鹿をかひけるそうき

田鹿

さひしさを何の里しも今はすまゐのものゝ田ふせにみなる

野鶴

深草は野へもつれてなつかしきや鹿にみつるそ鳴くらん

江鶴

入江なる浦の浦舟よく神と尾毛をそこや鶴なくらん

里鶴

かり人の家ゐやなる鶴なかん末野の里にいつてなくなる

曉鴫

鳥はなとかく夢に枝をさしてもしんさは田乃鴫は百羽かく

沢鴫

あはれをは夕暮ことおもひしに鴫立沢の最明乃月

田鴫

水引くや狭川つる流なるやそなにやそ鴫のなくらん

秋田風

浦風そよきて吹らん漆田の不破の関波よる秋の夕くれ

妹田露

露ハ袖月ハ枕にやとりけりわかみやこの秋のしか小田のかり庵

秋雨

山もとのかけ落る夕日にかすみて晴ゆく秋のむらさめ

山霧

松たかくなるよそになりゆく山本やけふもたちそふ岸の夕霧

野霧

まねきても分行人の一むらの夕霧や野中の花をさいたて立らん

関霧

あさ霧の有明やかくるゝ不破の関秋の夜寒ハ行にたつ

河霧

水無瀬河あさけてもみえぬ波のうへに霧たちのほる秋の夕風

浦霧

和田の原たなひく霧に舟ハ消てもしら舟みえてぬるゝの夕くれ

駒迎

今日ハ雲井の庭の月かけに逢坂いそけ望月の駒

八月十五夜

まこと何海のかなたにもあるとて我をや今宵の月のあかさん

夕月

夕日影たる残色にあるうす雲のたえまに出る三日月の光

夜月

さえし夜の嵐さやかなる月影は新しとも見ぬ秋乃夜の空

暁月

つらしと起きてもとまる月影よありあけの空に鳴く鶏の声

山月

富士の根乃雪より出る秋の月影やさらに思ふ波

峯月

月はやゝ峯に雲消えて也世のさかりなる山の嵐をとゞめて

谷月

桂はかるる山乃木のまにおもふてらす谷の月

松月

さひしさは限りある松山ならやさす月乃かけのそ

関月

いつもこの関に出る秋のかけさえしはなる人は来る月

杜月

月さゆる森乃梢に宿りけり雲はれたる秋の夜のかけ

野月

月はやいてこゝに小野にて横ぎぬ山路の末やなるるの空

原月

水青れいやまのつゆ秋風に月影なひくをみしかな

関月

月影のさそ面の関路にあくかれは行人やら面にとまらなん

径月

玉鉾の道のもとにたち立て人まちすくる月の影かな

橋月

さゝ波やうち出の浜に月さえて一すち曇せてしられけり

水辺月

名にしおはゝ人はとひけん月の影角田川原の秋の夜の空

池月

山鳥のはつさゝ長の池の秋の月さそやなかみをとけすむらん

沢月

一つ色ハそや伏見の沢よういらひてなかむる月のうつれる山を

沼月

不きと紀ゆへの紀沼に小屋をかりてもおかしなかむる秋のよの月

江月

月影のくまなき志て苫屋かりきる汀にむかひ影のあれはさひ江

湖月

明わたる秋ハあかりに入り鳴滝やにしの河瀬にたつる月影

川月

月影や田上山を出ぬらむ水かさまして宇治の川なみ

湊月

いつまたれなすの湊よりふなでして山出る秋乃夜半舟

湖月

舟はまだとをかふもとにとゞまりて波のゆゐぬふ志らむ波の上

浦舟

和田乃原八十乃島々をみて舟の浦に舟こぎぬらむ月待

濱月

下をれし松かぬらむそ月影ハ松をもちさぬ雪かゝるらむ

磯月

引しほのあとをそことえてさ島乃いそへにとまる秋半の月影

汀月

早瀬川とかれ波乃あみさそ汀よりかれ秋半の月かけ

浦月

奥津浪かけてさそはれ霧晴て秋まつ月に秋風ぞ吹

島舟

松島や小島乃海士のいさりせし夜ハいさり火出ぬ舟かれ一すぢ

浮月

鳴海かたしほ干にけらし浪まにも月影あたら海士の捨舟

泊月

松陰のまとゐゆくさかきくらふ舟月見むためとそ志つらん

渡月

志かの浦や舟出ぬやとひにしさしむる月の影かな

田月

今はたゝかりをそかけぬ刈りたる穂を山田の秋のよの月

郡月

志ら門をかつらもいかにや月影は井手のかとにいとそ清

禁中月

くも霧の程そおほらも萩のとのあくれはぬらす袖の月影

社頭月

住吉の松の秋ゝと秋やきれむかひの岸に月を守て

古寺月

昔ありし橘寺はさてもかつては松ありける昔路の月

古仁月

月のみそ住むとおもふ宿の荻の葉に人こそしれ

村月

月やあらぬ籬にあやなくも行き交ふ戸口に見ゆる里の一村

里月

花の陰に霞こそ越えし春信しら柴さそと月にとりや

山家月

りさゝハ月ハと人らやらふらん柴乃とこ戸をたてゝうらむ

庵月

いほハ丈月見んたゆとすまれけり松か影も風さえ草むらの不

庭月

月またぬゆふかけならしれ庭のそや草木のうへぬまて流るらん

井月

月ハ猶そこにも宿りてゆく井つゝ柱ふともおもへ影中行

園月

菊乃香のうつる露に袖ハ家の垣ほかけ道て袖やとる秋草の月を

濱月

野分して竹中径ハ分て紫の庭ひろみかね秋乃よの月

閑居月

さらぬたに月やられかの住居成むる所なれ径ふかくとも訪の霧

舟月

松原風吹てに江月やいり海の奥まて出ぬあまのつり舟

惜月

あけかさる秋らんとみえて秋乃月かけて光を惜付そみる

夜擣衣

宵の間ハおつる里風衣をうちてや人をともまつ夜寒なる

里擣衣

生駒山月や出らん夜ふけ行声はなく秋しらぬさと

聞擣衣

有明の月をまちてうつ衣のしらべに契る声の哀

遠擣衣

志津乃めか夜寒におこすつちのねぶりやいたく衣のおとのみ

近擣衣

あはれ淋しさは更てたえまなく侘て寝られぬ夜か長き秋

秋夜長

なかき夜も寝覚をまつ秋の床にすがりて有明の月

野分

あさほらけ秋かせなき末月晴て露もいさよふ海の面の高さや

葛風

吹く人も風のまにまにむすぼれうらぶれ見ゆる秋くさの夕露

径萱

あと草をふみわけてつれ露いけるかな世の人の萱 中紀

擣萱

月なき人の跡とはいはけなき露わけて寝る萱の秋風

野草欲枯

なほさかりの花の袖を折らむかも初霜の跡見ぬ忘れの末

残菊

ふみ迷ふ山路よりこそうつしけり千代へん宿の白菊の花

菊露

うつろはぬ程をこそみて置露のをかる色なる庭の白菊

山菊

をちこちに咲る菊の下水に月くみ渡る秋の山人

岩菊

たえまなく流るる水の岩間のうへに波さゆる菊の色のせ

水辺菊

天津空うつりゆく夜の宸沢の星の数そふさきの白菊

霜紅葉

暮みしさえもおかくる紅葉の色となる山の入日の影

初紅葉

露や深山にまたそめぬうちに紅葉まつかれぬ秋の山本

蔦紅葉

吉山や秋ふかひたる梢につたの紅葉よ枝のあかるれ

柞紅葉

ちるそはらもそ紅にひをとまれて時雨にそゝく秋の山も

楓紅葉

山のはの霧梢にめぐるふかきみちやちるゝぬるみちの色そこそせり

山紅葉

立田山錦はをるのをさえかれし霧におくあるまてみゆる紅葉

嶺紅葉

峯たかきやおりくたるらん日をへては紅葉の錦の峯の山人

谷紅葉

林あれ嵐の木立あれなら川よひて紅ぞ西谷のこえなみ

森紅葉

いかにして時雨ふるる途なるらん松にならひの森の紅葉は

杜紅葉

生田川そなたに人は夜ふかき世を過られもそふ森れ紅葉は

行路紅葉

そなたなる山かけこそ木下紅葉おくしても袖にかゝるに民

瀧紅葉

紅葉ゝや井かゝるとふかゝるおちても染むる滝の白波

河紅葉

秋河や紅葉の枝の色とゝる紅くれ林のつゝとし

岸紅葉

立田川みむろの岸やうつるらん紅葉にまさる河むさ路の月

古寺紅葉

泊瀬山ときはに霜ぬ色かへてそめても猶に入あひの鐘

遠村紅葉

紅葉は色にいてぬれて落葉にもなをこそのこる里の夕暮

里紅葉

散りしとなきこ霧の立枝の梢紅葉誰里みえて秋の夕暮

墻紅葉

うつろひて蔦の紅葉のこきまゝに我やとにちく庭の松かき

庭紅葉

村時雨拾しもあさき梢の山のはに染ぬる庭の紅葉かな

巖紅葉

いはね越み嶺の上にや松たちよりて紅葉の紅葉

松間紅葉

村雨に竹のもみちもなかりけり松にもれて色そまされる

竹間紅葉

山川の、いさゝ村竹みなひきて紅葉に夕風そふく

紅葉帯雨

村時雨秋の山のは紅葉そめぬ梢も色ふかく人そまつ

紅葉映日

紅葉をもおもひしるらん日影の色見えて霧たえぬみかさの山

紅葉浮水

さゝ浪文ちらすもみちの色なるや浮ふ木の葉かくるゝ庭の水の面

紅葉如錦

山姫乃をるにや錦乃たちぬらむ紅葉かさねる夕の色そふ

暮秋風

老となりゆくかけに入る暮乃夜乃久しかとは秋乃わかれ哉

暮残雲

ありしよの有明の月を時雨秋を今みるうき雲かゝる

暮秋露

行秋の露乃なさけもこゑもや草葉を風のふけはなん

暮秋雨

色こくも一時雨秋をともなひて涙に濡し秋の暮かな

暮秋霜

日本政府図書

残りや末野の月乃影くもる落葉をしらぬ嵐哉

九月尽夕

身乃秋八紅葉の色乃余波まてかけつゝ夕暮の空暮か

九月尽秋

せめてたゞ露をまくらとなるやらむ嵐ふく秋のかち

九月尽暁

秋を又残る露の哀れなるにありとあかつきの

志乃ゝめの空

羣書類従巻第百六十三上

巻百六十三上

五十一丁

国立公文書館
National Archives of Japan